

医療先進国の日本で、医療スタッフや病床不足、ワクチン接種の遅れなど、医療体制問題を浮き彫りにした新型コロナウイルス。危機の時代を生きる私達は今、非接触、外出自粛の背景に増加する、孤立、高齢者フレイル、ヤングケアラーといった深刻な問題と、先送りに出来ない少子高齢化問題を全国民が、自分事と捉える必要がある。

コロナ禍で改めて在宅医療が注目されている。今後 AI と ICT の活用がヘルスケア、医療に著しい進化を遂げることを前提とし、終末期医療や看取りへの対応、認知症患者やその患者の介護を担う家族との関わりを通し、治療だけではなく、死を受け入れ、最期まで豊かに生き抜く人の心に寄り添う医療が求められるだろう。それには患者や家族の生活背景を知る上で、地域や多職種との連携、情報共有が必要不可欠となる。コミュニケーションが希薄化し、人々との繋がりや価値を再認識した今だからこそ、デジタルとリアルを融合した新しいコミュニケーションを考えるべきだと思う。価値観の異なる世代の交流がいかにより健康を保ち、老いる事をネガティブからポジティブに転換出来るか、私はベルギーでのホームステイ経験から学んだ。地域に多世代が集う通いの場があり、そこは高齢者施設のロビーや教会の庭だが、子供達の姿が目立った。それは子育て世代の親の負担を軽減する為、施設入居者や地域の高齢者が子供の世話を担っていたのだ。通いの場がある事でフレイル予防に繋がり、誰かの役に立つことで喜びや、生きがいを感じられる。高齢者に限らず、困難を抱える人を支える事が当たり前になる生活の中に溶け込み、皆の穏やかな表情から地域に愛着を抱き安心して暮らす様子が伺えた。明るい未来の地域医療を構築するには地域全体で共助の精神を培う事が大切である。

人生 100 年時代。65 歳を過ぎたら支えられる側という考えは時代に適応しない。地域社会と繋がりを持ち、多世代協働で社会を支えていく環境を整えるべきである。特に Z 世代と呼ばれる若者の発信力を活用したい。SNS で拡散し共感が得られれば、協力者が世界中から集う時代でもある。具体的に学校の空き教室を、協同労働の拠点として活用する。豊かな知識と経験を培った高齢者の方々は社会活動の重要な担い手である。障がい者支援、学童保育、子供食堂運営など地域が抱える課題を、地域の資源を活かし事業に展開していく。ジムを併設して利用毎にポイントが付与され、地域の商店で利用出来る特典があれば、若い世代の参加も期待出来るのではないかと。一方、参加出来ない人への意識も高めなければならない。私の母が担う民生児童委員のような地域の事情を網羅する人と医療者が情報を共有する事も重要である。

誰一人取り残さない、どこでも安心して平等に医療を受けられ、支え合う事が当たり前になる未来に。私は地域連携の歯車となる医師として活躍していきたい。